

誰のせい？

疑問符の星の人

ゴミが落ちていました。私は聞きました。

「これ誰が落としたんですか？」

ふくよかな顔をした通行人は答えました。

「たぶんあの人ですね、確認してみます」

「よろしくお願いします」

「このゴミ落としました？」

「よく覚えてないなあ」

中くらいの背丈の人は答えました。

「なあああなたのせいで俺が疑われたじゃないか」

「知らないよ。アンタのそのゴミに対する善管注意義務怠慢のせいじゃないのかね」

全てのゴミを司りし女王、ミス・トラッシュ・トラポルタ・トラッシュは苛立ちながら喋りました。

ミス・トラッシュは彼女の所属する裏社会サークルを統括するボスにお話しに行きました。

「あなたのせいで私の貴重な時間が削られちゃったじゃないか」

「私(以下、甲とする)はあなた(以下、乙とする)に当該ゴミ(以下、丙とする)の所有権が属するか否かを確

認できる能力を持ち合わせていない。故に、甲は丙の帰属について、上位存在に照会をすべき事由が生じたこととなり、甲は、これを行うこととする」

全所有権を司りし、ヘイムダル・甲乙丙は返答しました。

「丙の所有権は、ロウの審判に基づき、公正かつ当然に乙のもとに帰属するか否か、甲より発問を行う」

全所有権を司りし、ヘイムダル・甲乙丙は、全ロウ(以下)を司りしロウマンに照会を行いました。ロウマンは、言葉にしてしまったことを全て実現させてしまう能力を持つているため、発する言葉を慎重に、それはそれは、慎重に選びました。そして彼は自分自身で発した言葉がもたらす影響を計算しきれなかったので、何も言わず、筆談で更なる上位存在に聞くことになりました。ロウマンは「誰のせい？」とカードに書き、「このカードをアウターリム星系十五番疑問符惑星四丁目二十七号のたけし君の頭の中へ、五秒後にインプットすることとする」と発言しました。すると、その通りになりました。

たけし君は相当に悩みました。かつてないほどの大きな問いに、彼の頭は戸惑うばかりでした。ああ怖い、ああ怖い。彼の頭はストレスに苛まれました。たけし君

誰のせい？

は、普段からクエスチョンマーク族の度重なる侵攻により悩まされているというのに。なんてかわいそうなのでしょう。こんなかわいそうな僕に更に悩みの種を植えたのは誰でしょう。誰のせい？ 誰のせい？ 誰のせい？

たけし君は突然ひらめきました。答えは単純。「誰かのせい」です。たけし君はすぐにロウマンにこれを伝言しました。

疑問の答えはたけし君の脳内、ロウマンの司る全宇宙、全宇宙のゴミを経由して私のもとに届けられました。

だけれども、もう遅いです。私はとつくの昔にその疑問の答えを手にしていました。そして結局疑問は疑問のままだということがわかってしまっていました。

「責任の所在は『誰か』という結論になりました」  
ふくよかな顔をしたかつての通行人は答えました。

「その『誰か』は誰か？」

「『誰か』です」

「それはあなたですか？」

「いいえ、『誰か』です」

「なるほどとてもよくわからなかった。ご確認いただきありがとうございますございました」

結局のところ誰のせい？ わかりません。わからない

ので、私はとりあえず自分に正直に、今を生きてみることにしました。